



小さき群

救主降世2014年2月号 第92号

2014年度北海道教区宣教目標

『奉仕をする人は神がお与えになった力に応じて奉仕しなさい』

ペテロの手紙一 4章11節

教会HP <http://www.obihiro-seikokai.com>

父母を思んで

オーガスティン 橋本知樹

昨年11月3日の「逝去者記念聖餐式（レクイエム）」が行われ、「亡き人を偲ぶ」と題してお話しました。「努めて冷静に」と自分に言い聞かせて臨んだつもりでしたが、お話しているうちにまるで父と母がそこに居て、そしてその頃のシーンが甦り胸いっぱいになってしまいました。充分なお話にならず改めて文章に現してみます。

母の遺品の中に父からの24通の手紙がありました。結婚する前の昭和22年頃の話です。いわゆる「ラブレター」というやつでしょうか？父は当時「明治鉱業」という石炭、亜炭などを採掘する会社に勤務しており、仕事に書いたのでは？と思われるような文面のももありました。癖のある懐かしい父の筆跡と共に私の抱いていた父へのイメージとは全く違う父が登場したように思えました。「親父はおふくろのことを案外大切にしていたんだな・・・」そんな風には見えない父でした。景気の良い時代には毎晩夜の巷に操りだし、いつも家にはいない父でしたから。陰で泣いている母の姿をみたこともありました。

でも本当は優しい父を実感したことが二度あります。一度はこんな出来事でした。当時私も父と共に家業を営んでいましたが傾くばかり、あるとき不満を漏らした途端に「平手打ち」を喰らいました。痛いのを乗り越えて驚きました。その時居合わせた母や弟が父に「暴力はいけない」と諫めました。すると父は「知樹済まなかった。叩いて済まなかった。許してくれ・・・」と手を付いて謝るのです。

こんなことは初めてでした。この時情けないほど弱くそして優しい父に出会った気がしました。

（謝ることなんかなかったのに・・・）

今一度は、私が転職後始めて転勤となり帯広を離れ信州飯田に異動するその朝のこと、妻や子供たちを連れて父母のもとへ挨拶にいきました。する

と脳梗塞で少し体が不自由となり気も弱くなっていたので、滂沱たる涙を流し顔をクシャクシャにして「行くのか知樹！」と言いながら私の手を握り離そうとしなかった父。その姿が今でも堪らなく愛おしく思い出されるのです。

さて思い出を母に移してみましょう。母の娘時代は「ええとこの御嬢さん」でした。祖父の事業の羽振りの良かったこともあり不自由のない暮らしをしていたそうです。衣服の誂えなどは常に札幌三越だったということです。足が速く、女学校ではいつも一番で卒業後体育教師になるべく上京する予定であったけれど、戦争のため断念せざるを得なかったようです。私の母に対するイメージは「負けず嫌いのプラス志向人間」といった感じでしょうか。父の存命中はどこへ行くにも父に気兼ねしている様子の母でしたが、父が亡くなってからの母は、まるでつかい棒が外れたかのように、思う存分の日々を送っていたように見えました。「いや、それで良かった」と思っています。そんな母が受洗の時に「知樹、おかあちゃんに洗礼を受ける資格あると思うかい？洗礼受けていいものだろうか？」と私に聞いたことがありました。この時私は「その答えは神様が出して下さると思うよ。お任せしてみればいいんだよ。」と答えたのですが、ふと考えたのは「斯く言う私に洗礼を受ける資格はあったのだろうか？」ということでした。今でも受洗される方に恵まれたときに思うのは「この人を先達として信仰の道を歩こう」ということです。

その父も母も既に天に召され、今は天国で仲良くやっているものと思います。母は父にあの「ラブレター」の話をしていることでしょうか。父は照れながら「俺、そんなもの知らん・・・」と言っているに違いありません。そんな父と母に再び会ったとき改めて言おうと思っています。「ありがとう。あなたたちの子供で幸せだった・・・」と。

19.鳥(からす)

数羽の鳥が彼に、朝、パンと肉を、また夕べにも、パンと肉を運んできた。水はその川から飲んだ。
(列王記上 17 章 6 節)

この聖句は、正しい事を王に言ったために命を狙われるようになったエリヤが、ケリテ川のほとりに隠れていた時、誰一人助けはいなく、食料もない時、鳥がエリヤのために三度の食事を運んで養ったと言うのです。はたして、鳥がそんなことするのでしょうか。しかも、一度だけというのではないのです。

レビ記によれば、生物は清い生物と、汚れた生物に分けられることになっていて、鳥は汚れた鳥の仲間なのです。それなのに、ノアは洪水後の最初の偵察として鳥をえらんでいます。まだ洪水が引いていない時期だったので、オリーブの枝を持っていくことができなかったからです。鳩は2番目の偵察に使われたので、オリーブの枝で乾きを伝えることができたに過ぎません。なのに、鳩は清い鳥とされて、鳥との扱いに差が開いています。

鳥が物を運ぶのは珍しくなく、特にひかる物を見つけると巣に持ち帰ることが知られています。そして、意外と賢く、BMWのテレビコマーシャルにあるように、道路上にクルミを置いて車に殻を割らせる(コマーシャルでは鳥が失敗)ことは実際にあることです。

また、物忘れする人のことを「鳥」といいます。我が田舎では、「鳥の忘れ倉」という言葉があります。鳥はどんぐりなど食料を蓄え込みますが、鳥はバカだから、蓄えた場所を忘れてしまうというものです。山を歩いていて、鳥の蓄えた栗などを見つけたという人がいます。しかし、実際はなかなか賢い生物で、日本でも古来、熊野の神の使いとして伝えられています。「鳥の忘れ倉」の木の実は、そのうち芽を出して実際の倉の役割をするはずで、自分だけのための倉ではなく、好みを利用できるみんなへのプレゼントを蓄える倉として、それだけでなく、自然を保護して、倉以上の役割を担うかも知れません。

(『聖書に見られる理科のことば』文芸社刊より)

1月の教会委員会の報告・決議

1. クリスマス礼拝・関連行事の反省がなされた。
2. 震災原発被災の子供の保養をすすめる「沖縄・珠美の里 福島子ども保養プロジェクト in 久米島」への支援を行うことを決定(詳細は別記)。
3. 教会建築に関し、現況及び今後の取り組み予定の報告がありました。
4. 2013年度一般会計並びに特別会計の収支決算報告案及び2014年度一般会計収支予算案について受聖餐者総会への提案を承認しました。

今月の教会歴から

◎被献日

2月2日は「被献日」で日本聖公会の固定祝日です。主イエスの生誕から40日後のこの日に、マリアとヨセフは律法に従って幼子イエスを神殿に連れて来て、産後の潔めとイエスを神に捧げました。この時シメオンという信仰あつい人がイエスを抱き上げて救世主(メシア)が到来したことを神に感謝しました。この際にシメオンが歌った詞が『シメオンの賛歌』です。

この祝日は先ず東方教会で広まり、その後西方教会でも行われるようになりました。カトリック教会では、潔めの式にろうそくが捧げられ、1年分のろうそくの祝福式を行おうそくに点火して行列するしきたりがあったことから「キャンドルマス」とも言われています。

先月の教会歴に追加

◎使徒聖パウロ回心日 1月25日

今まで理解できなかったことが急に分かるようになったことを「目からウロコが落ちる」と言いますが、この出典は「使徒言行録」9章18節にあります。キリスト教信者迫害の急先鋒だった熱心なユダヤ教徒パウロは旅の途中で天からの光で地に倒されて神の声を聞きます。「サウロ、サウロ、なぜ、わたしを迫害するのか」。そして突然、目が見えなくなりました。しかし主はダマスカスに住むキリスト教徒のアナニヤにサウロを助けるようにと指示しました。アナニヤがサウロの上に手を置くと、サウロは目が見えるようになり、「目から鱗のようなものが落ちた」と言っています。

季節の風

きさらぎの

愛と祈りの

暮らしかな

羽州

「きさらぎ」は陰暦で二月のこと。
“寒いので着物を重ね着するので、
衣更着”の説あり。



聖公会探訪!! 2-1

らんらん納豆

子どもの頃、帯広千秋庵(六花亭)の“一つ鍋”と“らんらん納豆”が大好きでしたが、それと「十勝小唄」の詞中の「ランランラントセ〜♪」が“らんらん納豆”とリンクして不思議と耳に残っていました。その後、天城主教と山本エカシの関係を知り、たどって行って『アイヌ神謡集』に行きつきました。その中の『銀の滴降る降るまはりに』の冒頭詞、“シロカニツペ ランラン ピシカン、コンカニツペ ランラン ピシカン…”を知り、これはあの記憶の“らんらん”ではないだろうか?……(調査中)

『アイヌ神謡集』は文字の無いアイヌの人たちにとっての大事な口述で伝えられた叙事詩“ユーカラ”で伝承者でもある知里幸恵の渾身の訳であります。

知里幸恵は

知里幸恵は1903年(明治 36)に幌別郡(現在の登別市)に生まれました。父高吉は知里、母ナミは金成の出身でした。後、旭川に移り住み、伯母金成マツや祖母モナシノウクと共に暮らし女学校に進学しました。幸恵は学校ではアイヌ語を禁じられて日本語を強制されましたが、家では叔母や祖母とアイヌ語で生活をしていました。殊に祖母のモナシノウクは偉大な叙事詩ユーカラの謡い手であり、かつてのアイヌにとって幸せな時代の歴史や伝統文化などを学ぶための最高の環境であったでしょう。

1918年(大正 7)にジョン・バチエラーの紹介で言語・民俗学者の金田一京助が金成マツの家をユーカラの研究で訪れました。これは、金成マツが聖公会の伝道師であり幸恵も共に旭川の聖公会伝道所に住んでいたことも一つのきっかけでした。しかしこれが、幸恵の生涯を決定づける出会いでありました。

金田一の訪問を受けたマツは家族と、食事の用意をどうするかアイヌ語で交わしていると、金田一は「気をつかわなくて良い」とアイヌ語で言ったそうで、一気に緊張が解けたとされています。

モナシノウクは膨大なユーカラを暗唱しており、マツや幸恵も伝承者でありました。ユーカラは「人間のユーカラ」(英雄叙事詩)と「カムイユーカラ」(神謡)の二種類に分かれますが、後者はカムイが一人称で語る形式をとっています。神・自然・人間との関係が謡われています。

知里幸恵はその後、金田一の強い勧めもあって上京しユーカラをアイヌ語から日本語へ翻訳する作業を始めました。アイヌとしての自信と誇りが彼女を奮い立たせましたが、やがて重度の心臓病で召される日は思いのほか早く来てしまいました。

(次回はその後をご紹介します)

「沖縄・球美の里 福島子ども保養プロジェクト in 久米島」について 舩津房子



このプロジェクトは、2011年12月、月刊誌「デイズ ジャパン」によって立ち上げられた「DAYS 被災児童支援基金」が始まりです。主人の大学時代の同級生が福島県いわき市で「いわき放射能市民測定室: たらちね」を立ち上げ、子ども保養プロジェクトの福島事務局も担当している関係で、私共も昨年の初夏にプロジェクトに協力させていただきました。

私達が経済成長優先のもとに子供達の将来を台無しにしているようで、心苦しい限りです。福島県をはじめ、近隣の県の子供達が健康を害する事無く人生を送れるよう切に祈っております。

NPO法人沖縄・球美の里

本部

東京都世田谷区松原 1-37-19 の 3 0 2

DAYS JAPAN 編集部内

TEL : 03-5376-7898

FAX 03-3322-0353

2014年2月 主日礼拝の役割分担と聖書日課、聖歌の表

	2日 白 被献日	9日 緑 顕現後第5主日	16日 緑 顕現後第6主日	23日 緑 顕現後第7主日
司式	下澤司祭	下澤司祭	下澤司祭	下澤司祭
説教	下澤司祭	下澤司祭	下澤司祭	下澤司祭
補式	寺本司祭	寺本司祭	寺本司祭	寺本司祭
信徒奉事者	山本雅之	大村倫子	尾関敏明	山本雅之
奏楽	大野耕一	下澤依子	尾関真理・小貫耕喜	寺本敦子
アッシャー	小貫耕喜	寺本敦子	飯塚幸子	尾関真理
オルター	飯塚幸子	小貫睦子	夏堀寿美子	木末幸永
日曜当番	飯塚公男	船津房子	寺本敦子	大村倫子
旧約聖書	マラキ書 3:1-4 大野佳子	ハバクク書(続) 3:1-6, 17-19 高橋献一	シラ書 15:11-20 和田里美	レビ記 19:1-2, 9-18 佐々木長太郎
詩篇	84	27:1-11	119:1-16	71
使徒書	ヘブライ人への手紙 2:14-18 山本雅之	コリント人への手紙 I 2:1-11 大村倫子	コリント人への手紙 I 3:1-9 尾関敏明	コリント人への手紙 I 3:10-11, 16-23 山本雅之
福音書	ルカによる福音書 2:22-40	マタイによる福音書 5:13-20	マタイによる福音書 5:21-24, 27-30, 33-37	マタイによる福音書 5:38-48
入堂	228	482	401	113
福音	447	563	561	489
奉献	354	521	255	357
陪餐	395	483	496	493
退堂	311	316	116	316
備考	教会委員会	婦人会例会		

説教ダイジェスト

司祭こるべ

「そのとき、天がイエスに向かって開いた」 マタイ福音書 3:16

この言葉は、イエス様が洗礼を受けられた時の聖書の描写です。そもそもなぜ、イエス様が洗礼を受ける必要があったのでしょうか。洗礼を受けたバプテスマのヨハネは、「わたしこそあなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか」と畏怖を込めて述べています。まるで先生が生徒の所に教えを請いに行くような、逆転した関係になっているからです。そこで考えるのは、謙遜とか、へりくだり、相手に委ねるといったことの意味です。大人が最も苦手とすることの一つは、自分より年下の人や、経験の浅い子どもや若者を対等の人格として受け入れ、尊敬の念をもって接することです。大人は自分が子ども扱いされると怒りますが、では反対にどんな相手でも対等に受け入れているかということそうではない。大人は実に身勝手なものです。

神様が人間の姿になってこの世に宿ったことを祝うクリスマス。しかしこれは、神様が聖なるものを脱ぎ捨ててまで、俗である人間と同じ姿になられたこと、さらに人間に仕える身分にまでご自身を低められたということに他なりません。人間を救うためにはそこまでしなければならない。そういう神様の決意がここにあります。

イエスは洗礼を受けられました。それによってイエスが得たものは人間の弱さと有限性です。では、わたしたちは洗礼によって何を得ているのでしょうか。それはイエスというお方を介して結ばれた、救いの約束です。そして神様に倣って、小さき者から学ぼうとする謙遜とへりくだりが与えられること。主の平和とは、このような関係の中に実現するものなのかも知れません。